



町並み

江戸時代、有田には皿山代官所が置かれ、泉山の
大公孫樹の辺りに上の番所、岩谷川内の眼鏡橋の辺
りに下の番所がありました。番所は有田の磁器の技
術を、他所へ漏らすことを防ぐために設置されたも
ので陶石の運搬や人の通行など厳しく取り締まって
いました。



〔写真上〕 中の原・山口和代家は天保11年(1840)の建造物
〔写真下〕 晩秋の有田路を散策する女優の浅野ゆう子さん

番所と番所の上に繁栄した、有田川とその支流の
流れる谷間に位置する地区を、有田では内山と呼ん
でいます。谷間に細長く走る町は、地形的にも取り
締まるには都合が良かったようです。内山には後に
赤絵町となる、赤絵付けの技術をもつ限られた十数
軒の家が集められました。上幸平・大樽・本幸平に
は登り窯の権利をもつ窯元の多くが住みました。更
に、中野原の辺りには資本をもつ商人が多く住むな
ど、内山は「有田千軒」と呼ばれるほどの繁栄をみ
せました。

しかし文政11年(1828)に大火にみまわれ、内山
のほとんどを焼失。泉山の池田家と数軒の家屋を残
すのみとなりました。その後まもなく復興され、そ
の時建てられた江戸時代の家屋のいくつかは現在も
残っています。

内山地区は平成3年4月30日、国の重要伝統的建
造物群保存地区に選定されています。

皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報

No.14

李参平



李参平の墓碑(白川)

『金ヶ江家文書』『多久家文書』の中には、朝鮮人陶工・李参平について記されている部分があります。有田では陶祖とも呼ばれる李参平ですが、彼に関する資料はこれらの文献史料しか見つかっておらず、わずかの記述から推測する以外手がかりのない、謎に包まれた人物です。

豊臣秀吉は文禄元年(1592)と慶長2年(1597)の2度にわたり、朝鮮半島へ兵を送りました。後に『焼き物戦争』とも呼ばれるように、従軍した各地の大名は帰国の際に多くの朝鮮人陶工を連れ帰り、それぞれの土地で焼き物を焼かせました。史料によ

れば、李参平もこうして連れてこられた陶工の一人で、始めは多久長門守に仕え、元和2年(1616)に有田・三代橋に移り住んだといわれています。その時多久から有田へ移ってきた者は18人で、全員焼き物細工ができると記されています。李参平はこうした陶工集団の指導者的立場にあったものと考えられます。

当時、皿山は田中村と呼ばれ、農業を営む人家もまばらな土地でした。ここで李参平は焼き物に向く土を探しまわり、泉山の白磁鉢を見つけると、白川の天狗谷に窯を築いて窯焼きの仕事をしたと記されています。しかしながら、李参平が初めて天狗谷に窯場を開いたのかどうか、実際のところは明らかになっていません。

天狗谷では複数の陶工集団が操業していたと推定され、そのうちの一つが李参平の率いる集団だったのかも知れません。磁器は天狗谷より古い天神森窯などの有田西部地区の窯で、陶器と並行して焼かれているのが確認されています。

朝鮮・金ヶ江の出身であった李参平は、金ヶ江三兵衛と名乗り多久家の被官となり保護を受けています。また泉山の陶石を最初に発見したのでその採掘権も持っていたといい、運上銀(税金)を願い出て藩に納めたとも記されています。

泉山の白磁鉢を発見し天狗谷に窯を築いたという文書記録は『皿山代官旧記』にもあり、そこには李参平ではなく家永壱岐守の名前が記されています。家永壱岐守については次回に紹介したいと思います。

皿山の風物

「川かざり」

いよいよ7月。夏も本番です。夏といえば夏祭り、7月24日の古木場地区を皮切りに始まる、「祇園」がすぐに思い出されます。明治40年(1907)ころまでは、この祇園でも、秋のお供日と同じように当番町が決められていて「おみこし」の行列があり、当番区からの道踊りがあったといわれています。

さて、8月2日は中ノ原・八阪神社の祇園の日です。この日は早朝から地区の人が集まり川の飾り付けを行います。昔から、八阪神社や中樽・天満宮のように川に近いところでは、川を掃除して、いろいろと工夫を重ね飾りたてたといいます。そこには、陶業に欠かすことのできない水への謝礼の気持ちと、余興の意味などがあるようです。「川飾り」と呼ば

れるこの行事は中ノ原地区で現在も続いています。

祇園の日には、各地区それぞれお宮の境内などに仮設の舞台が作られ、青年団の芝居や歌、映画などが上映されました。酒宴とともに祇園の楽しみの一つで、お参りを済ますと近所の人達といっしょに見物したといえます。



川かざりの製作完了。夜を待つだけだ。



黒牟田新窯古窯跡

最近の発掘調査から

前回は向ノ原窯と天神山窯の紹介をしましたので、今回は残る2つの窯の紹介をしたいと思います。



1. ムクロ谷窯

調査前に付近を踏査した段階では、窯がどこにあるのか、見当もつきませんでした。果たして本当に窯はあるのか。そんな思いで鍬を手にしました。

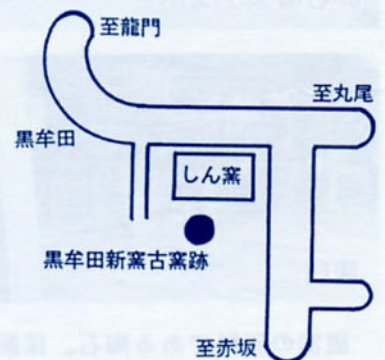
現在、この丘陵には工事用道路が南北に貫いていますが、この道路の両側には窯の痕跡は見られません。ただ、道路の西側の落ち込んだ斜面に製品の散布が見られました。しかし、それが窯の存在を裏付ける決め手とはなりません。というのは、有田町内のいたるところに「べんじゅら」が落ちていますが、破片自体は窯跡でなくても落ちているわけです。

そこで道路を掘り抜いてみました。すると、敷き詰められた固いバラスの下から窯跡の一部と思われる焼土面が現れました。どうも窯跡は道路の真下に眠っているようです。

果たして、窯跡は道路に沿って残っていました。焼成室は窯尻から数えて、1室・2室と4室・5室を発掘しました。特に、1室と5室の砂床（製品を置いて焼成するところ）の上には、製品や窯道具が多量に残されていました。その製品の中には、元文3年(1739)と箱書にある伝世品と同じ製品の色絵素地が含まれています。この窯の廃窯時期を推定する

決め手となりました。物原（失敗品などを捨てた場所）は窯の西側にありました。そこには、17世紀末から18世紀前半にかけての製品が堆積していました。

以上のことから、この窯は1690年代～1740年代にかけて操業された窯であろうと推定されます。18世紀の窯にしては操業期間が短いことから、この窯から出土した製品は年代を比較的限定して考えることができます。17世紀に比較して、遅れている18世紀の製品の変遷を追ううえで、重要な資料となるでしょう。



2. 黒牟田新窯

前述のムクロ谷窯の調査の時は、窯跡を探すのに苦労しましたが、黒牟田新窯はその苦労は必要ありませんでした。地表に窯壁が露出していますし、階段状の地形をした現地は焼成室がそのまま一つの段となって残っているところもありました。

窯尻から数えて4室・5室周辺を発掘することにしました。前述のムクロ谷窯は奥壁にだけトンバイ（耐火レンガ）の使用が見られましたが、この窯は奥壁、側壁ともにトンバイ（耐火レンガ）を使用しています。規模も焼成室の横幅が約7m、奥行が5mと大きなものでした。また、窯の西側にはしっかりとした側溝も築かれています。こうした側溝が西側にあれば、物原はその反対側である東側にあるのが一般的です。

東側の斜面を掘ってみると、幕末から大正時代にかけての製品の堆積が見られました。最下層からは「安政一年」(1854)銘のある染付瓶が出土し、安政1年には確実に操業されていたことがわかります。

次に操業年代ですが、廃窯の時期は調査前の聞き取り調査で大正5年ごろと聞いていますし、出土品の内容もそれを裏付けています。築窯の時期は前述の「安政一年」銘の瓶や「安政六年(1859)松浦郡有田郷図」に描かれた窯の図により、安政年間以前であることは明らかです。また、窯の東側の丘上には、側面に「天保十〇年」と刻まれた山神社の祠があります。ですから、天保年間(1830～1843)にはすでにこの窯は操業されていたと考えられます。

発掘れぽうと



碎石機スタンパー



唐臼

陶土工場

磁器の原料である陶石。採掘された陶石は陶土工場へと運ばれ、陶土となって各窯元へ納められています。でき上がった磁器製品からは想像の難しい陶土工場の様子をご紹介します。南原の田島商店を尋ねました。

作業工程を追って見ると、まず、工場では運ばれた陶石に付着している山の土や石などを取り除く、水洗いの作業が行われます。選別した陶石は4センチから5センチぐらいの塊に砕き、砂（この後の工程で生じる砂粒のような陶石）といっしょに臼に入れ、スタンパーにかけられます。スタンパーで2万打するのが目安だといわれ、この工場では13時間ぐらいかけて砕いています。

粉体になった陶石は水と攪拌され、上ずみだけが取り出されます。（この時、下に沈んだ粒子の粗いものが、前述の砂と呼ばれるものです）上ずみは沈殿させ、泥漿を取り出し、脱鉄機と振動ふるいにかけて処理します。これに圧力をかけ、取り出したものが陶土というわけです。ろくろ用と鑄込み用の陶土は形態が異なり、各窯元で使用する陶土の固さも異なるため、ここから先は注文に合わせて作られます。

陶石が使用できる状態になるまでわずか1日。時代の流れとともに、各過程の作業も短時間で済むようになりました。かつて陶石は水車を使って砕かれていました。農繁期になると水量が変わるので、作業のサイクルも変わったといえます。今ではすっかり懐かしい昔話となっています。

野老(ところ)

先日、大樽の手塚信雄さんから「ところ」の鉢植えをいただきました。

「ところ」はヤマノイモ科のつる性多年草で、日本・中国南部に分布し、名前はインドネシア語の「ton-gkol（とんころ：かたまりの意）」に由来します。（参照『新・佐賀の薬草 [社] 佐賀県薬剤師会』）

有田では、その根っここの髭根が老人の髭に似ていることから長寿を願って正月の飾りに用いたり、苦味がありますが食する方もあるようです。漢字では「野老」と当てて書いています。

今、資料館で楽しみに育てているところです。



白川の細流

さわやかな夏がきました。明るく強い陽射しのおかげで気持ちも元気になりそうですね。

すっかりご報告するのが遅くなりましたが、お陰様で昨年度の民俗調査は無事に終了しました。今、東京の大学の方で集めた情報の整理作業を行っています。

たくさんの情報を提供してくださった町の皆さん、学生全員で「まつり」におしかけてしまった境野の皆さん、車で目的地まで送ってくれたおじさん、おまんじゅうをたくさん作って待っていてくれたおばあちゃん、本当にありがとうございました。

有田の人の優しさをかみしめて、学生たちは帰りました。今年も調査は続きます。あれもこれもと情報をご提供ください。どうぞよろしく願います。

(萬)

有田町歴史民俗資料館報 No.14

発行年月日 * 平成3年 7 月 1 日
編集・発行 * 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地
☎0955-43-2678